駿臺雜話

121.43
M985s

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s

ガラス使用

駿臺雜話卷之五

智集

槍術を學ぶ事
法を知らざるの事
作り花
源義秀
泰時と公祐
忠利家と孔子
無法の大事
無上の說道
運慶が佛
鳩鵠の物まね
壽八郎が續松
大佛の鏡
楠正成
武田信繁
孫臏韓信の兵法
不忘向君

国立国会図書館蔵書
国立国会 29.7.22 図書館
337917

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

大敵(たいてき)の死(しし)

後素雑話巻四

浅草文庫

焼香(しょうこう)する時(とき)、瞋(いか)りの気(き)を含(ふく)む人(ひと)、すこしもあらば、後(のち)の益(えき)なかるべし。三休(さんきゅう)の葬(そう)送(そう)の事(こと)を聞(きき)しに、会葬(かいそう)の人(ひと)、門(もん)を過(すぎ)ゆきしに、皆(みな)下馬(げば)して、轡(くつわ)をとりて、おのおの歩行(ほこう)して過(すぎ)ゆきしよし。誠(まこと)に竹樹露(ちくじゅつゆ)すくなく、池(いけ)の芙蓉風(ふようかぜ)あるがごとし。諸(もろ)人(びと)、三休(さんきゅう)の徳(とく)を感(かん)じ、積善(せきぜん)新(あらた)なる事(こと)、疑(うたがい)なし。夕日(ゆうひ)猶(なお)のこりて、人(ひと)くすこしらず。後(のち)、人(ひと)、句(く)柄(がら)よろしく、詩(し)哥(か)を朗詠(ろうえい)しけるを聞(きき)しに、その声(こえ)沈(しず)みて、哀(あわれ)を催(もよお)すやうに覚(おぼえ)しが、やがて、声(こえ)高(たか)く、詩(し)哥(か)の声(こえ)に似(に)ず、やうやう、常(つね)の言葉(ことば)となりしかば、興(きょう)ざめて、聞(きき)にくかりしと、ある物語(ものがたり)を聞(きき)しと、ある人(ひと)、語(かた)りしが、おもしろく、

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

燭をとらしめ、前なる机をおしやりて、世俗の談話に燒蚊香をおく眺しとうちやすくいひあやまれるものくいまゝ中ぴとをこれれ、世の噂をもやすくも思ひきけハ却て労ゐなしと、我等の思ひそよ在邇而来諸遠といふ古もあとくハたとくに遠きよ求るを常の事と志まくまをたてゝ近きを忘すてゝふくん究と射る者共的のみを志して、おもをおもはぬあとくあき片燒蚊香のたとへ

屈くも同くく依て名を雅んこと。宋の羅大経の鶴林玉露に吾道とは尼の作やうに盡日尋春不見春芒鞋踏遍隴頭雲。歸來笑撚梅花嗅。春在枝頭已十分。

元もとの心の儘よりてをきよ求るを事とくなれと。あるとき山野よ春を尋るとて。春ともうまの宿の梅くおれるをもとめ入こと能も炊基とやくもうまれて。いとおと志ふくおもへ又もとも過去さるもとも陽もなれ。かのまゝおもおれ今。たゞ東晋の時。桓温三秦に打入こと能て。王猛書見こと秦に豪傑なの小さくい

ゆゑ一人も及ぶ事なし。恒温の眼のごとく考ふるに。
所をもわすこと秦の豪傑王翦よりも多かるべきや。眼前
の豪傑あれどもとらざりしなり。豪傑よりも
忱基をよくとりきたりたる。又知るべし。古よりの傑漢なり。
英気と遠慮をもちひたり。甚威望をもて敵国に及ぼすゆゑ
ちく蕭牆のうちより敵あるは事をきらひ。忱基をよく晴
きよめんがために。織田信長関東関西の
諸国をとるごとに一村ごとに
ておく智ゆゑ後さまで忱基をよくきよめざりしなり。
と。物さびてよろづ沈吟の後をもて義決のごとくなり

やさるゝ物ゆゑ。此談も各ありのまゝに真義をもて
あらそふやうなれども。終名のかゝるゆゑ無し。
ゆゑ又此談をよく後の人きゝ方まちがひ
又一種の乱世もおるべきや。韓退之の張巡
空自長。張巡一尺便旦光や。張巡二尺
をよくきりて。張巡のごとくおりて退。事平の書をよのこと字を
写すとの事なり。ものをよく明らかにして真用をかゝる
なり。張巡一二尺の。ゆゑなくとも。さるべき
も。猫のごとくおりて。よくきりて

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

のごとき、まことに細人廣望、
うして聖ヤ賢ヤの志尽くしてを遠
きをてしし難し。をさをてしきをを必ずみやく
志ふかう、前後の比の関尹子を見給まし。吾道ハ庭
ここと、よく明中のまを區畫すべし。関尹子ハ関令尹
喜の書なり。尹喜ハ老子の道徳経をつ言も
ハ人の為よかれとて。今世ハ他
後人の他ずく。尹喜ハ名を伝ん為
さまく老子ハ通ふ為うし庭
但老子ハ通ふも隠ずくれ。吾儒ハ簡要とする事し。

ふとくハ口つ分くこそよかくそ
ハおのずのまのこそなり。りの所おそ
ておのそまちそをみくそ
そうさ尽くそおそにのくおのち
く初そ表てくそ愛そ明らかれ
ハ其明悠長寛大ずく自勉ず遠きよおひかん。ととて真
の明とい也。そして已の材智よかこ
ととのおりきをやすず尽おのそおくそこそとを見ること
し。其明識通敏ずくをさるのこやそ及ぶ
そおくの事ハ又くく下ずの慕ずのおそし。事ハ

又へ病ありよ。あくそ乳汁をおやまひとして取之人多きよし。明入地中明夷君子以莅衆用晦而明の象にて。古の聖王晃旒目を蔽ひ。黈纊耳を塞くも。聰明又それにやまされざるよし。晦そなたらひて表りんとやうよ。倭漢ともよ大智遠識の人ら。已の材智よ傲くる事ありしよ。彼もそ多よ氣奪ふ女造の辭と審ふよ。雙方の情をおさする事わらんそ必障子をおくそ事もおくそ。

んよちらぬやうみてそうまし。ハいひすうら。おのけうら聖人の名人とをもし。聽斷神よ每し。人く畏服せうらいよ。勝而明なのおうらひや。今よりく世の談者偽人編して實ごとうら事故多うらひ。中よも能の最感しおくしよ事わよ。閨房もおれ時多よ幼少の子多くおそりし。おま閨房しや。每ごとの事とを閨房ごとの馬よりく風うやく。我者ごとの事とを。よ其代官とおくまそおま。家中村岡よ住ずら者男女老弱そいくそ。

337917

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

をかくおくとしていよいよおろそかにおもいよ家人の妻をうらやましくおもうて、其妻をうばいとらんと、せくこころまでの望は甚妻をうばいとらんとをおもいたちまちおもいやめ、今又おもいやめ、又おもいやめ、おもいかえしかえしするうちに、やうやう辞退をおもいとどまりぬ。其後は、其妻ことをまったくおもいよりぬ。是は、父の配分のまちがいより、一家の者共、争いおこし、訴訟に及ぶ。其実の事をよくしらべ、親人をも多くあつめ、双方の意趣を聴訟のうえ相手の勝と定まりぬ。

其後又おもいかえし、こころにくく思う、其実の事を、おもてむきにせんとおもえば、父の配分のまちがいを、証拠とすべきものなし。又、内証にせんとおもえば、残念なることおびただし。とかく手出しさせまいと、八今更ながら、其配分のまちがいを、我過と観念をいたし、自分の金銭をあつめて、其妻にうらせ、其上にて、同勝ちの成敗をたのみ、已が過失をわびるにしかず。我を常に賢人と思い、我を常に賢人と思う処にて、智をとられ、私をとられ、我が古今にまれなる実体者と思いこみて、此談を考うるに、燭奇なるものなり。其

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

此君の徳くらきやうにみゆれども。君子の道は闇然（あんぜん）として日に
あらはるゝものなれば。そのすゑひさし。されば小人の道は的然として日に
其跡をたつことをほどしてやうれど。小人の道は的然として日にほろ
ぶるのすゑなし。此理を考へて明らかなるをもとめ。必ず
くらくすることいふ事なし。虚飾をやめよといふことなり。
むかし此儀を名のいへるを賤しむ。翁のいへる
を只嫉（きはら）く一類ひとしく談ふうとさらに根もなき事にもあら
ずば。せん命議（せんぎ）のごとく。翁微笑してのたまはく。法師のやうなる
ことばし。翁の此法を楽しまざる事なし。不及の者とやくして
各感しあへりき。

運甓（うんぺき）の工夫（くふう）

さる人翁にいひけるは。月を亙りて断（たへ）ず。さりとて燈下のまはりをとりて我家
むかし子路持満（ぢまん）の道を孔子に問ひしに。聡明睿智守之以愚（しまもるにぐをもてす）
とあるを心得かねます。翁のおほせには。聡明を晦くするも。聡明を十分に
あらはしやすくおもはずし。物ごと十分にいたらぬことをよしとせしは。世の中のさる
をすれば七八分にしておさめおきて。あまさねども。しかれども
いふものゝ一足（たえ）にすぎたるは。必後に悔あるものなり。或人
佛師運慶が工夫をとく話し。佛を作るにも耳鼻を大きに作り
大きにすくしおきて。耳鼻を十分程に刻（けづ）れば。後に直しやすく。目
は小さく彫おきても。かさねて大きにほればいかやうにもなるべし。

をしり同志十分よき程よりおくまで大そう見ゆる時よ
わさしまさってしかなるまさまに同じ小
さいすれば第一の仁徳とすれとも
一家の蘇頌こそ幸心付本偶人を作れる
あらんしまたくさひけ多くおまし
人之欽不竭人之忠以全交也と
人の我為よ杯酒を傾ちと志し
とりおの欽と十分よきこしおなし
もれもおまし。おまし奥おまし
也陳の公子完齊の桓公のあまよ親

すこぶる本を好んでこれを読み、甚だ博識にて、今のごとき武事のよろしきをも、久しくして、おのずからその弊を知り、もしくは改革の令を厳しくして急よりその弊を救ひ、すべてこれらの政事、ことごとく古法に倣はれしゆゑ、よく騒動をも治めたまへり。易は王用三駆失前禽と云ふ。天子の猟をも不合圍とし、網の三面を去りて一面を張り、一面を去禽のごときも、皆古法なり。甚だよく政事の分別ありて、二君を補佐したまへり。諺よいたく彼有不穫稚此有不敏穉、彼有遺秉此有滞穂、伊尹寡婦之利とは田畝の事なるに、周時より寛政おほくは遺利あ

る事をもらさず、又士方より直さしめし、箴諫の言葉をも、尚嘗て歴史を考るに、漢の文帝ほど、文帝は最堅実なる君にて、好事・多欲の二君、ともに天下穏やかなる時なるに、功あらんことを欲して、ややもすれば、張湯・桑弘羊を用ひて、安ぞ貴ぶべき。文帝の後者、孔子の羊をもちて、威怒を十方より、さんとよりも重荼毒し、民心離散して、漢家の危事累卵のごとくに至れり。文帝の仁政後伸宇多帝、新法を造り、功利を趨るをよしとして、朝野騒擾し、民心愁苦して、本朝の禍あるに鑑み、二君ともに英明のうまれ

これによりてみれば人各材力に偏ありて、謀欲を立て
さんやうして、格法の道よくやうらされ、三驅の法を立てゝ行はれき。
宋の史に史臣仁宗を贊して曰く
四十二年之間、吏治若偸惰、而任事蔑残刻之人、刑法似
縱弛、而決獄多平允之士、國未嘗無嬖倖、而不足以累治
世之體、朝未嘗無小人、而不足以勝善類之氣、君臣上
下惻怛之心、忠厚之政、所以培植國基者厚矣。
此贊よく仁宗の朝を推論して、その理を盡せり。さもあれ
已前は仁宗の時君臣ともに聰明とはいはれず、寛容を專らとして
せしはまことに三驅の遺風なるべし。

法を江河のごとし
されば古人も人君は貴明不貴察といへり。明と察とは八
似て似ぬ事也。明は楮幕のごとく座を照らすなり。察は燈のごとく
其本あかく殘る所なし。堂中をあまねく照すなれど、察は紙燭にて
物を照らすがごとし。くまなくあかるくして物を見分けつべし。いち
ぢやくなれども、照す所をみてわかるゝやうなる故に人君の明とは
燭臺のごとくなるべし。紙燭のたぐひなる人の天下の政は寛大
にして江河のごとくならず。瑣細にして溝渠のごとくなるべから
ず。江河を大きにして、いかなる大舟をもうけやすく、さりとて深廣
にしてあやまちて落ぬるも牝しからず。溝渠は小さくして

去りけまいなみうじ。去ぬし狭(せば)き狭みうて。
牝(めす)しさをよろまて。苦あるて江河を踰(こえ)わたりてもある
ものおれをきうじ。溝渠(みぞ)ものもすくまじ。
こととく後漢の郎顗(ろうぎ)う安帝(あんてい)よ上(たてまつ)る書よ。古今不易(ふえき)の名言
江河のおとく。易避(やすくさけ)して難犯(おかしがた)とうまじ。
といまじさまて去うおきとく。
ようやすれとうまもおうじもも伸像(のびかた)と繋(つなぎ)して政令
頃苛(ころあひ)なるを悪むとうすこと寛大(かんだい)するよう
せすまとく。時よること幸(さいわい)みうて厳急(げんきう)ますを喜(よろこ)
多(おほ)し。大(おほい)うく泰平の世を民俗(たみのならひ)姦情(かんじやう)よ流(ながれ)き。驕奢(きようしや)を好(このみ)

おう。今(いま)を治(おさ)むよ。とく。学易(まなびやすく)をけとく。
やうく。舊弊(きうへい)ううきやうなを改革(あらため)を革(あらた)め。政令(せいれい)を厳
うて。民の耳目(みみめ)を新(あらた)にすれ。必(かならず)ううく民ううく可(べき)
興楽(きようらく)始(はじめ)やうく。民をおうみうて。国家(くに)の利病(りへい)をそうく。
多(おほ)く私(わたくし)の利害(りがい)のこと生(しやう)ずるおよ。甚(はなはだ)ううく。
よおう考(かんがへ)を廻(めぐら)す。衆論(しうろん)競起(きそひおこ)うく。実効(じつかう)もまもらうくなるおて
う。古(いにしへ)ううく明君(めいくん)の人(ひと)をまよ。よう拘(かかは)らうて。其功(そのこう)を
発(あら)わさ。畢竟(ひつきやう)天下の利(り)となる事(こと)の中々(なかなか)よ不安(やすからず)
おきく。ううおうとも。死(しに)さよ。ともひ。遠(とほき)
を慮(おもんぱか)ううく。小智(せうち)姦吏(かんり)ものうう。

きおよそ[illegible]むら〳〵鄙の子弟鄙風の改をせず舊俗の弊を改ざるときは〳〵車服の驕を禁じ田廬の制をさだめ〳〵其害人をなすもの其服を褫獨より[illegible]惡美すれば其あるべからず取て鄙伍に編ず。其[illegible]さほ狂の漢人ありとも編じて、さらに我有子弟の[illegible]之。我有田疇子産殖之。取我衣冠而褚子產而死。雖甚嗣之。孰肯從之。侵暴の害除きて、[illegible]青を惠人なるべし。孔子の[illegible]

すれば[illegible]ず。[illegible]寛を貴ぶ。[illegible]猛なる時をかくわず。[illegible]叔ら寛を過むまたは苛酷をもとめざるをもて民[illegible]寛を習ひて[illegible]猛弱ありて民[illegible]ず。[illegible]ざる兵多くも[illegible]治の[illegible]猛を貴ぶ。[illegible]猛をも用ひまもしむ。[illegible]猛則民殘殘則施之以寛。寛以濟猛猛以濟寛政是以和也。孔子の[illegible]

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

鴟鴞の巣

ある人、園菓の木無く、大なる民屋ありすんハ
あるべきやうに甚だもあやしく、客人よりて初めさまをよ
くよく見れば、屋の四隅のたるきより、椽も、割竹を以て新敷く仕
切り、多くの小間に一尺餘の鳥籠をよせ、籠ごとに雌雄の鴟鴞を
籠きのごとくにして、籠の内に餌食を入れ、雌雄ともに番ひ
をそろへ、さるまよひの後、多くの雛を生ずるやうにぞ
なりぬ。扨もやうくそちこちに、かゝる鳥籠を置ならべ
うる義ぞと尋ねしに、人鴟鴞を畜ひ、そだてゝ、是を四方へ
賣ひ捕らせ、同好の友なきものゝ為にぞ賣ひ渡すとぞ
答へぬ。

おかしよ。然ばとて、其鳥を見てはやし、其事をきゝてやしなふ
事はせずやみぬ。其後、文字をかくやうに成ぬ。文字かくを
よろこぶ事、筆をめでゝ、墨をめでゝ、紙をめでゝ、文字をかくと
いふ。文字はもんなり。文字をそこなふ事を「紋を破る」
といふ。文字はもんなり。紋を破ることを考へて、筆墨紙を
そこなふ事をおもふべし。筆墨紙をそこなふ事をおもふ
ときは、文字をかくことをやめねばならぬ。其ごとく、人
にも、我志をそこなふ事をおもふべし。古語に、「人
はまた人をそこなはんことをおもひ、人はまた人にそこなはれ
んことをおもふ」といへり。まことなる哉此言葉。今までなし
し事共を思ふに、今さら其よからざるを知る。

こみよりて富をうてくるよりに志のよ
又でなくてなんぞ一ツ通もうすまじ
訓ぬ人のわれまこゝろきるはのたゞ素な
るまゝよろこばるゝをたゞやすしてそ
事ゆゑやめをよろこばるゝ者はこゝろそ
仕ねばならぬをおもうてなるべくはこの
ハちうよりも中々国家のためそうなる
也古の郭進の人已の材智をわすれ
をおし富貴を強ひまじ、行との代わ
よ二ツそ善おれまもあまそ。大うま

とをき事の為きなのこと思ふく従き
のあるさうまおもふく。貨財と費ひ人力を耗ひな
うち。何の甲斐なきまになるおうう。志のごとなる人毛
ふく病を求め。凡なして没をせ。忠厚な凡ものよ敬ま。
奉競の為ひは長ずれ好よ。争ふ凡小利を得ふ。なうて国
家の害を貽すもの好きまおふ凡、なん
先代よりも見ひまく。天下の耳趣し
ゝ類ふ狩くまふくふまおふくふ凡。家の肥ゝ室中よ志
はくふをまふ凡。唐庚存斎の論をおふほ考ふ。国
家の富地ふ常よ民の耳目よ習ふ者ふまふ。不得已よ

さらよりまで改易を交置しても民心を労しよりこれと煽しけれども其おおきまよ仕そこも一粟をも
ゆるさゝるをもつて祖宗の代より世官なりつゝ更迭こうさされまゝあるをもつて
あるさんの数ゝ後嗣の代よりも建置く。
嫡子ゝくそ祖宗の志をなをもつて或ゝ改革し或ゝ新
とくそうまよ泥て世のつゝきひ治のさ法たけよも変事
と。其よりさ一生なる尽ゝ可をそうて高爵を与へきさ行をもて
善政を行つへきさ又なをそうて孝子忠孫あるをもつて
をき。宝ゝく祖宗よりもかなる古を接今

を就して治をけゝよ。其ゝ
書尽ゝ結ゝ語ゝて治ゝ
ゝくゝ卅

あれ時諸ゝ事を今てけゝよ。毎ゝ傍ゝ君ゝ之後ゝ
事をおゝくゝ一人のゝ心ゝ
ゝ多ゝくゝ風ゝ人情をゝくゝ
義も好ゝて是迄ゝ。能ゝ病中卅ゝうゝくゝ日を
ゝしゝ。ゝ。この書を以ゝ児輩ゝ為ゝ
ゝをゝくゝさゝて好ゝとゝ之ゝの一人
善ゝ世ゝ是識ゝ人のゝ

思ふやう、我世よ一杯の俗人おわりて、高なき名利をとらんは彼らが為にわらはれん。閑寂を楽しむに如ずと、それより閑寂を楽しむ。甚深の禅書をかうかうまで見こなせる。仍て伊藤の風を慕ひ、我も通世の事は隠者の様をおもひ入なわち、さる所に徒然草も伴生よ条願し。詩、とうとう出離生死の事、深く涵泳と云る。なお其見識、いわゆる老荘の

ま限らんは行我ものあるごとを見て取るの幸要を施し一ん書。二鏡等本巻物語なるよふにおもひたるごとおもふの仏なり。世共流儀なるに、いかせん芸術ごとも亦好ものさるまでに風ま亜ひさらまおもひ、牛車し行弱なる男女ぞ。棒ひて見すごすべきさまよ。源氏物語を我国共宝と云れぞ。いうなる故よも考られ、宝て俊語の、物を語るよん破してもおもわらず。いさゝか鹿子まちがを指く。家亜の秋実を老ぐ也。そを世共物語を往釈し講

説して毛詩の淫奔の詩を挙てこれを
の戒世の教とすれども是も俗作の
いつおとなきは一南八脩」分齊家の事。雅頌を編述
徳の婦也風俗をよろこび堅巷の男女名言情の
きぶんぶんとして媒妁のごとくに居処を
淫奔すれどもこれ又伊勢源氏の
始終これをもて心を尽くさせ
歟如くに伊勢源氏。
長恨歌西廂記のごとく甚兄長あつて醜悪な

るものそうの経を聖人垂教の書よりて
薫猶をおそうするなり。荀子
佛よりの事をこうするなり。荀子
耽らの事楽しむすれどもなり。
拠落ちおよび二端を去て高妙
の説しおくまでも多くの奇怪妄誕
陋の説こそのごとくして義理よりも
弟子の如く兄弟
る事。佛法のさる好色まで
又も世よおろかなる

ひとゆかしきもあまたたゞ理勢ある事なるべし。
中古より雜念をはらひそく我心よりおこれる
事にて入事しづかに悔怠をそなふる人多年
知あるまゝを思ひ朝夕々々あるまゝの一念
よりおこるあしきことをおもひ又よきことを
思ひてまよひ道儉約をとくすゝめたらひ
しとそこゝまをいふく世を治むる君なのゝ
きやうをなして安き事をよろこびおもひ
き行をなして安き事をよろこびおもひ

のみこゝろ多くたゞ君の為ふかく聖賢の教をも
かへりみず人物倫理ともにしらざるやうにて
まおろかもおろかなり。鉄砲鞘槍弓矢
鎗中よく射ることを第一とし一旦を見るとも
諏訪流なんど人をおどし得ることを専一
武門を隔つる事にて武門は今日甲
冑をつけて。女色に溺るゝ一生を捨名譽
おしまずして。女色にきてもかまわぬ
も人能の險一芸をとらへて
まで。

もよくもあしくもあると論ずるにたらず。ただ好むところを尽くすべきのみ。ただし好むところを尽くすべきは、老荘の語なれども、老荘の意を得てこれを言うにあらず。ただ字面を借りて言うのみ。今俗の口語をもって可以取可以棄（もってとるべくもってすつべし）と言うがごとし。可以取可以棄の語、荘子に出でたり。荘子の意は、可以取とは、天地自然の理にかなうをいい、可以棄とは、天地自然の理にそむくをいう。今俗の口語に可以取可以棄というは、ただ取るべくまた棄つべしというのみにて、荘子の意とは大いに異なり。

言語飲食よりはじまらざるはなし。言語飲食よりはじまるものは、また言語飲食よりおわるものなり。雖然、そのはじまるところを尽くすべきのみ。そのおわるところを尽くすべきにあらず。そのおわるところは、自然にまかすべきのみ。雖然もまたしかり。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

おくそこの物をおくなどのちひあるやうにおぼえ
いかゞ考ふるに幼少の時分に物をおくに
そこまでくとやこゝろのとゞくやうにおくべし
おくにのがるゝやうにおくべからず
こゝろの後の悔ることなかるべし
すべて義ということ今の義ばかりにあらず
すべて義ということもやはりこゝろもちの義
なるゆゑ義を専らにすべきなり
出るにときけぬさきのこゝろもちを
かゝる通義ゆゑ孟子も義を人路と
いはれたり

おくりものも礼儀ばかりにおくる物と
すべからず　たとへば十文おくる時と
多き人をえらんでおくるもあまりこゝろ
こゝろを御もちひにならざるゆゑ
おさなくこれぜに十文の物をおくるに
なるべくは十文ぜにの物をおくるこゝろ
せんぎ彼やくと我とかの地蔵ぼとけ
ごとくにおもふべき彼此と十文の物とて
ことわるべきにあらず　豈天下の利をおこす
銭を費して十文の物をおくるに
もおよばざるべし　古人の出事おくに
もきさきをおくするまでもなきを

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

いくすく武藏を若くかくすれすまゝきいさく從きすものやう
なるまゝは援猥の器識なくてはかなはぬ程の事ぞかし。高
人と稱しやるるあるへありの事やいる。楚王失弓楚人
得之とかくまゝかなれく。天下は利よわしなりとうれゞ楚人
得くとかかなとも其器量一つゝきたきなるまゝ。本朝たる
ゐくらやらやをかしれく。其玄行世ま傳らさるこそ遺恨なれ
すまゝかのまゝ。

渡船番

ある時錯なる本含せしに、稀に見れぬち美比象國の出
そこなるまゝ鵬なる古より義枝諡行の人をあれわる仏まゝく。

ゐる義物語なりしぞ、あらゆ道理のさくゆる後の事なく。記録
のあるも國史ならぬ時政事実の界をあらはし、當時
の人物又その人の玄行あぞ志すくべき事とも、あわれぬくしは
志すし至つべきものなり、よく忠臣義士はあれども世に湮没
志て傳られぬも象國にの多事ともいふべし。其後武家の
世になりて、勇將烈士其ゐるかの國かのある死を潔くするの事、歴
擧するに遑あらず。其後あれもなく見えしうちに風義の勢ひとも
下なれてならぬしよりも武を治る人もなく、ちく、平家治世
のなしめ小松の重盛をぞ世に賢人とを称すれ。一文治
董暴逆にして君を背しも重盛の忠よりのかく、忠厚姆

多のかつ〳〵國さ。縛よ後世尼子多ら苦ん。
さまざま。悦笑さの大名おて。そさま。ふ。
材識暗弱ふ。名〳〵もいて。多ふ。
おく〳〵ふ。島の朋輩。おと後にきく。教〳〵みふ。天下の人な
傑〳〵も。泰治嚴やかふ。して。
なの。悦笑の名佛号をなするも。
雲壮するもわまも。教を秩を。優重
き。将卒八運籌決勝ふ。異なく振舞
なり。さまざま上経ふ。忠清の士夫將
ふも。雑兵と同ふそふ。多ふ。昔の人。

よく〳〵勤ふ。世〳〵教ふ。又統後る。
ふく。平家全盛の時さ。壽永揚〳〵
安徳帝を奉ふく。西海ふ赴〳〵折ふ。
旋せ〳〵。途中ふく。車駕よ。出ふ。
へふ〳〵。後の重盛のさまの。
〳〵。平家の勢。日よ。盛〳〵ふく。又
逃ふく。教門よ入ふ。肥後人通や。
の世〳〵ふる。八條会よ。
ようわふよふて。加藤よ。
ける。抖擻行脚〳〵て。

給ふてきよく恥をきよめさせ
給ふ。そこにて
渡邊右馬允(わたなべうまのじょう)番のまゝを感じ給ひ。義経西国へ落ち時渡邊
おくり番つゝがなくよきまでおくりまいらせ
見まもりて後ふたゝび番あらそひ
おこさゞるまで十二人を附そへ給ふ。渡邊(わたなべ)
内遠慮(ないえんりょ)なくひたゝる泰北(たいほく)きよ
行のまゝなりけり。加賀の国にて一人の法師(ほうし)
子細(しさい)ありて義経を頼(たのみ)おもひ遠(とお)く
やこゝにはれいうしそまをこゝろ
清之助(きよのすけ)其時(そのとき)鎮西(ちんぜい)の住(すみ)そく
番の妹(いもと)をもとゝなり相具(あいぐ)して
下向(げこう)せよ

ける。彼(かの)衛門(えもん)義実(よしざね)おもくおもひ
義引(よしひき)ふせ給ふ。其(その)後(のち)番(ばん)の郎等(ろうとう)
さまでもなく右馬殿(うまどの)の石塔(せきとう)
を景国(かげくに)とてつくり。その使(つかい)
ふたゝび番(ばん)の親(おや)の郎等(ろうとう)
教(おしえ)なりとて墓(はか)をかく修(しゅ)理(り)
やとありて番(ばん)多年(たねん)の石人(せきじん)
をくしやくしやにこわしとゞめ
はぢなるもの哉(かな)。番(ばん)こゝろ
そこなはれたり。笑(わら)ふべし。

かつらおくまで駆さくおくびさ
る。あるころよりのぬ十つひ後く
よつひ行ごろもくやうもつ修
分の着ものくふ小ゆうよ如
わら附こくひをきよ、きとそ
まよひくそとすきけ大将くわ
おくなまをにくわさきた
さそうるお行大将奥勘泰衛を伐し時番をりて
、ふまけれ汝とくよ所のいとふ
すいふてハ行おそうおなる
ふ所ハ

駿台雑話　二　巻之四

我さうくしやくて徒馬鞍かと作ふ番うて
好くひらう所令ゆしかくひ共番うて
さまくを守ごろ所ハやなん番いう
なの人ともらひと始殊死とらくを去
操潔かるまひ共よ逃ことを求
やくく令とをすることさくく肩とせ
亡、そんや貞節のごとく仇を
亡を勢ふ附くく苟免るとまかくて
ふふく士との終てす番うあとき作
大佛の銭
さまとも忠清奥納うたとまくて

…ことはなく、新しく八幡宮衛の事申し付られ、其後も度々…
壮厳さまおもしろく、御酒宴の席の…
艶女ども歌舞し、…敬衛の…
…妻を遠ざけ、丈夫のすぐれ…
…ことを…
…ちの大仏を燬…奉を…
…おそれ、鎌倉中…頼朝のた…
…ども遠ざけても叶ま…
…罪障懺悔の為とて…

…衛、近世松永弾正の…
…の猛悪甚しき大罪と…
好義長と我し。光源院殿を…
…この人共ぬま…
…ども、鳴呼併せ七人を轟惑する事何そ…
…寛文の比…松平敬…
…金仏をつくり、かく放逸の風俗の…
て残らず天下を利益せられて…
まわるゝ…其卓識傑古今に傑…
創業の後文明の開き…かくのごとき人をおもそうし…衛

なるべきの一つめ也。ほうねんや、
伊豆もる若政多きゆゑ、しばらく上国をあづけ、天下の殉死を禁じ、諸
侯人質をやめ、大俳を減じ、殉死を禁じ、後世
の害を除き、人質をやめしまでは、その術もしばらく後世
大俳を減じ、殉死を禁じまでは、その患ひすくなし。
よりて大功被あるべきこと也。但し此時伊豆もる限られ
端執政にもなるべきを明らかにして、結侯結役人と封じて私の
通をとりやめしめば、私の怒なく、兵端
甚盛べきよう、なし。

[illegible]の持もの一つのまでもしらべ、もし人をなさ
うの次第、已に材智をもつて、人を
殺害なるべし。よつて伊豆もる、
威勢ありて、よく所為を官も此まで行
爭て言を容るゝなり。昔魏
文侯、平易近民、必歸之
周公此意ありて、よく下をも
よろこばせ、其ゆへ、その作ら聖人の
今より此化に感ずるを、此沢
うら、此執政の一カ条のみにても此事
おゝく出造作なるべし。其よたく

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

其中に新右衛門といふ人は、執政府の從事なりしが、殊更に
文飾なきさまにて、伊豆守のなみなみならず思はれしが、新右衛門常に
諛諂をなさずして、其為人、東方朔に似たり。ある時いかなる事にか
の籍を献上しければ、御前に披露するとて、伊豆守つゝしんで居られ
まいらせしに、鏡に塵付てありしかば、伊豆守袖にて拭はれ
ける人々見てありしに、新右衛門傍にありしが、いや御袖にて塵を
拂ひ給ふは如何といふ。伊豆守、この事を見ていふ、之は如何なる事や
なりしことなれば、それやとて、其後伊豆守、何事も無く笑ひ給ふ氣
色なかりしを見て、さて御答なかりしに、ゆかしく思ふも念
を入れて思はしましと、いはれしに、新右衛門、仰の如く御念

の入たる事なれば、鏡にて塵をすゑ給ふぞ。およそ念をいれぬは奉公にて
ある事ながら、あまり念を入過るも、よからず。伊豆守殿の念を入れ給ふ
あまりなる事もあるべし。いまだ人を見ず。昔唐の玄宗
方士に命じて楊貴妃のありかを求めしに、方士蓬萊
宮に到りて貴妃にあひ、帰るしるしをこひしかば、玉
釵ぬきて与へしに、玉釵細工など誰にもありぬべし、念
なく只世にまれなる誓約をこそきかめとて、玄宗
貴妃との密語をいひて還報しける。長生殿の上の私語なり
玄宗は方士を疑ひ給ふこともありなんに、此密語にて貴妃
の事ならんとて、他人知るべき事にあらねば、何の方士

ましは明慧の云ふ所に物語へかくいひまうしゝを泰時のきゝてしく
基とせよと云所に如れ。天下ハおのづから云所に治まるべし。いまだ
それは明慧の身を治めずして何ぞ先づ云所に如く是非
をわかつべからずと。泰時深く信じて。父義時死去の時。所領財
寳をあまた備ありて配分して。其身ハわづかにのこり分のみとらるゝ
されど二位の尼泰時に自分のすくなき事をおほせられて加増あるべき
よしありしに。其時家督をうけ給ハりぬる上ハ。身に余りし事
もかくハ。身をもちはべるまじくといひつゝ申してうけひかず。これ
により二位の尼も感涙を及ぼされしとぞ。其後兵革を避て親
族肅穆し。諸人もこれに感服しけり。明慧浮屠なりしが

ども。孔子は季康子の盗を患へし時。苟子之不欲。雖賞之不竊
といはれしに同じ。泰時の明慧の一言を信用して。操舎く
治まりしも。聖人の言に合へるなれば。かしこしといふべし。明慧
も亦すぐれたる高僧にありしなり。泰時家督の後は
おとうとばらに所領をわかちて。庶
弟どもにもわかちて。寵長を待事恭謹にして。争を分
ち訟を聴く事ありしかども。東鑑にも
る老儒の治めをきゝし。泰時が時訟ときに。雙方對
決しければ。ずいぶんに一方は相手の理に服して。ひとえに己
が非とよしあしを争訟に及ばゝ。今の時

もあの地を受給ひてゐたりしかども一云中ごろ及び
ならくやうに泰時感じて。十ヶ年を限の法令を設け
決断すべき仕業今と多く改新をきしかども。即座より
とくおこなひ服すべきの政令を定めて。なほ古き
きとく。別て恩賞と行ひきまりて後も。なほ古き物語よく
知く。紀度も守よりなほりしかば。ゆゑ有し古き物語よく
乃ち。やがて一つの志よき芸術を設けて。後芳へ伝ふ。
も泰時此ことを聞て。安堵せざる事なかりき。
又恩威ならびおこなはるゝ事。泰時よりはじまりて。
よき後嗣よりよく時頼時宗に伝へ。法令も遺訓をもて

傍くに政を執りまつりこと。
ハすべて小像氏全く朝の暗君をして。
安きを得さるべし。泰時此功とい
愚の如くするにあらず。
位を脱履るごとく浮屠よりも。
ーと。その外のまゝやいふべき
人のごとく。其外宗廟社稷の
る逃去敬仏を崇とするまでやわらく考君徳を蔵し。治
体を先とし。人を扶けますべく。其治親
をふかくして。をを大なる時。うまく泰時のごとく

人、おしなべて其の縁会ある人物を考るによりてよりよりくれる
ものゆゑ人なき事にて但建国のころ
集まりてこそ血気勇悍の人材幕下に雑
皆鈴蘭ゐたりしが其中より名ある
壮士といへども多くは志操潔白ありて
の人也。其和らかに至誠なる性質
一時の折節を以てくく陳謝せしめ
往古今文武を論ぜず人なつかしく
朝も夕もの事也。梶原も怒を忘
よりて感ずるものなきにあらず。

と称せしとぞ。おのれごとき寛厚長者の
諸将の中より来るものゆゑ
同じく兼ねて像の高きにより
なり。其実はさすがの
おやつきばかりにて
悪すべからず。
楠正成
建武中興の人物中にて。縉紳家より
藤房、輞谷、

楠正成こそよく輿論のゆるす所なるべし。諒房と云卿輔弼の任ありながら。其材の大小をしらず。正成が材。諒房好悪を論じ。直言極諫朝廷を傾奪の風鳴といふべし。始まる所正成帰順の功と世を興復の風流と死すべきものにあらず。忠義什一あるに似たり。尚時勢の正成に比すべき人あれども。世に伝ふる所正成の為人を見ず。世に楠氏遺書と云ふ流布する地あるをや。

後人の偽作なるべし。去ども其書も亦一味忠義の気象あり。一概に云ふべからず。始終おしはかり量の多くは一義を以て論ずべし。名ある男子といへども。時勢に随ひ。名を多く失ふ中に。楠氏の子孫累葉遺訓を守りて。一門風族心を尽し。国家に報ずる。三代の内一人と雖も心あやまりなすなきは。古今比類なきなり。心底徒澤深厚なるべし。諸葛孔明が比なるべき人物なるべし。

その長後を謀りて父子固まりたるに死するも同じ後なくなりて
きよりさるにより孔明もまた如何ともすべき道理を失ひ
功名を遺すに至らず一生を終んとせしこそうらさ
らに蜀の士どもの心願を遂ぐる不得已して出仕へしう。
下知閑暇のよりよき君臣の時をお処伊尹呂尚をもしのぐ古人の論もあるべしに
ハうて功名料半の人なり梁
後醍醐帝笠置に隠幸の時も
もろともに遂て参りしかば元弘の
なりて孔明ともに大事を
ハ後の後も尊氏義貞の
せうほまでときに孔明とともに撰せ
ありし其後を用ゐ孔明
割の兵をいつしか編
を用ゐ韓信より
項王の勇割を
の勇弱を
好て其勇を
後醍醐帝より
ハ時よりもさうまをいく其後
用て取勝しも
せうほまでときに孔明とともに撰せ
ありし其後を用ゐ孔明
割の兵をいつしか編
を用ゐ韓信より
項王の勇割を
の勇弱を
好て其勇を
後醍醐帝より
ハ時よりもさうまをいく其後
用て取勝しも

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

水敵を破りし正成が狗兵木偶の敵を鏖するを見へたる寡人
の兵を用ゐると一轍に出ざるはなけれども摧堅拉鋭とい
ふ韓信が材を敏速にもして攻にまさるのあるべき
かれ正成が材ハ持重によくまもるがまさる也攻るべき
人ならず韓信に謀をめぐらしめ給ふよく正成がごとくなのられ正成
に敵を攻しめばよく韓信がごとくなのらんか古人も攻守嚮背
踐じと云ハいつも難に決せる所也意必と
韓信が兵を利諸将に於て一身の為なり正成が兵ハ
忠義のためにいて國家の為也是甚底績けんとの集て
用ひられけん湊川の人々決して死に人皆に応じ

金剛山のおくふかに南木の明神と號す神ありて山の中堂
を正成と見たる者らは孫子呉子が法にして正成常にしたるを五部に
其功をなすまでも孫呉よりも出かなたし正成はく
正成を称賛するとて是を今に正成は達孔の臣にある
を遂るくし。但正成ハ如くの如く絶倫の材なり一聖賢乃道
を学ひけるか孫呉が術をのみ学ひしゆへ忠に候とはし
湊川にて自殺するとても身正季と最後に一念を語るにや
かくのごとき陋し。

足利家の乱。

足利一統の後幕下の人物すくなし。細川頼之ハ一世の良

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

相ともに物ごとを出で来たるときと合点をして幼きを輔け、よく奉し、
ことを御せんとするときは、よく光教れ材ありて、物ごとに小節
を用ひて威を張するまでを主とせず、よく陳若周邦ことを
志して義気脊弱の者ありて、甚輔佐の役ありて、
いかにも姦邪をそしりて賢人を好むこと、その騎奢をきらはず、僧
逆を肆にするときは、教えをもって、甚衆をのうつくしむこと、
元をそこなはざるやうに甚人好むところの名門
大族ありても駁庵将軍よりも、應仁文明の比
多勢の細川勇山嶌を分ち、縦令ひ英雄の
ひいき平合戦して虚き月なし。

親族相敵して、その毒鬼蜮のごとく、甚暴虎狼のごとし。天下
の人倫の道絶えそこなひ、多くの月地を陥さんとするときは、
元をそこなひ古今孔世の物と成るべし。これ
季文代の物と似るべし。これぞや唐書を續ける信宗昭
宗の時よりも、甚だしく多くの人のこもよも
うけ揚復恭が姦宗を已こうるものなり。夏心に生ぜん
かくのごとくなるべし。古今よりの変まで
うつりかはりしこと甚だしく、近代の野史や、新奇の人稗代
の衆人を賞しやすやすとおもひそこなひ、さくも
孔世の風俗うつりやすきものなり。

さまで應仁の後亡利春丸代を務めおく。前後百年ばかりの
其名ある勇士寒促飛廉の徒よわしきを見。貴賢點舍こ
類なく。ゆく賢愚得失を論ずるに及ず從容として
務む時。右回道灌と共に名ある兵を率ひ
と称氏山内扇谷と當るごとく
び時越後の上杉房顯山内の家城續
道灌を其父道真のと扇谷の上杉
宮心を多くして顯宗を嫡庶の義を猶
蔑して。扇谷朝臣あんとてして我
もわろ人衆を多く祿をとく山内の権
和よなりけれ行よ。御よ兵粮を招
う為よ後さまよ。多よ。思ひ
よ多ごさまよ。御よ。考つごも武田
所よ文学よ多さ。後歌よのごと
衆人よもいよし。能いたと思いて
うな時さう我会社そのある歌よく
敵よ心後さう時臨歌よ。そ
景集やく彼の角こう、かきあつめ
よ歌とのやく言句書よ。康正元年の
多きも味方も入まよ。こ日をこと

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

まもなのつるぬさまとも味方より武威(ぶい)を像(ぞう)
憲(けん)さくのぬーにするよ自脱(じだつ)して。仕(し)
わるいおろそかにつてよおくつてこうこと
のこうくのれ哉もまくくまで富(とみ)
よ。補(ほ)後(ご)京(きょう)重(しげ)頼(より)やくく京家(きょうけ)より人の世よ志(こころざし)
持(もち)ぢうまくく仕(つか)ふくよなん。敵の男(おとこ)
二ツ引(ひき)よ矛(ほこ)よ於(お)の紋(もん)をうさ
月なうこうの後(のち)ひの毛も。こうう
うまく途(と)をおこしよ月のおよ敵の男(おとこ)
うくく中村(なかむら)もすうこ者(もの)をなく我陣(わがじん)

なん仕(つか)をけれよ。よる壮年(そうねん)中(ちゅう)
たけなうこ考(かんが)へ。こうこ。楚(そ)の
きおおく。おこもやす。おなの
けやう。中村(なかむら)を打(うち)おのくのやさ
志(こころざし)こもの中とすの仕(つか)よ仕(つか)
つくこれと義(ぎ)さう和合(わごう)おう
おこひくすう。う。
するの力とう。誰(だれ)も志(こころざし)と。就(つい)を無
をーおおこふひ渡(わたり)の就(つい)と。孔子(こうし)
えやくいうやもこうひくんう。さ
と古(いにしえ)の勇士(ゆうし)の不志

来元といふ。其志気多く義を
重んじ死を恐れず。常に必ず
忘るゝ事なし。我輩共常々
志気場に死を怕んずるなれども
せいやうのもの。おれこそ多く義を
重んじ死を恐れざるものなれ
や其会議を定めくさ〳〵
も事方も死一ぺんの
やさ〳〵哉とのみ
武田信繁

多の忠利の事は世に文永保の元
おゝ。甲州武田信玄の事は典厩信
代武功のこと尚ひく。種々
ども信繁の事は聞ことまれ
所もさすして其ま
般舟を重して信玄を慶するゆゑ
しよ。能〳〵いても信玄の武勇
てく信玄の四郎勝頼と
おゝして死と罪きく。
氏真の外祖父なるよしく。

ひとつなるべく、年を経ても、信実あとやすく、信虎海よ高敬よ流義して、一生をなん終るべく、信繁信虎のあとを中ぶして、信玄をたすけ、ついに信玄も加るる事なく、よく国のおさまるべく、信玄はつねに、信繁信敬の両人を、必ず忘れむべく、我あやまりあらば、両人にいさめよと、つねに言われしとぞ。むかし後漢の末、海を強と光武のたたかいありしに、虞延と信虎とは、光武に帰順して、ともに一生を終りしとぞ。

巻之四

義士

けだし、芸張の節よりは、孝義よりは、忠義よりは、義士こそ、まことに尊ぶべき事なれ。孝友なる人は、忠義なる事あり、忠義なる人は、孝友なる事あり。されども、義士は、孝友なる人にても、忠義なる人にても、義士にあらざれば、義士とは、いわれず。義士は、前世史書にも、多く載せて、後の世まで、感称する事なり。

人世に感ずるあるべくして、いまだ、あらざるは、義士なり。義士は、死を軽んじて、義を重んずるゆえに、死生の間に、処して、義を失わず。義士は、死を軽んじて、義を重んずるゆえに、死生の間に、処して、義を失わず。義士は、死を軽んじて、義を重んずるゆえに、死生の間に、処して、義を失わず。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

するく。お孫よく討死せしまつりぬ。偖よく見定候段令と感
く。其ま、を佛うまつり傳子にまさりて教養実にてよお育さうもなく。
野やの子と墓も海とやうとも。尽ぬ事ながら。
こんあるくこうとの又一条よあるとひ、うへの沙汰ぞよく
も。後座におすくうとと。又一条よ。法人同座する時。好
なの沙汰と及ず。勿よあるぬ事ぬ。て其座を立るといよ
よく生るぬ。信繁人うち恭なする物こうと。も分をする
おと厳心よく。うと物も洩信よ同せ反。其高風落首
人よ恥さうく。又一条の合義よ。急く時。敵ちくなうバ人

数を急よおうとあるくうとあるぬ。そもよく佐野義隆り
言おうとく。兵をまるこ志つまいる。言
威光ぞうく。軍法よ。勇よ、そあるぬ。
やうと。ぬ人のあるひをいうく。急よ伝
そあるく。ぬ人をあるく。世よとく。強国の
こうく滅さうよ。志つあるよ。命脈剛
信云死してくれおうく織田氏ぞうと
なのけうく。まよおうとれも。

兵法のたま

後日端よ。本命くけれよ。例の雑

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

我国流の兵法を修せらるゝよう
等の敵をくわのうけ人数をあつ
かう術きまりのやうなる事共。如何(いかが)
あるべき哉と問給ふに。信玄公
も兵法を以(もつて)治めよ兵法の
義(ぎ)は下(しも)知(ち)軍書を考(かんがへ)よと兵法の
書(しよ)ばかりを考(かんがへ)ては軍形(ぐんぎやう)兵勢(へいせい)の
事(こと)は知(し)れがたし常住(じやうぢう)戦場(せんぢやう)の
ごとくに兵法を修行(しゆぎやう)せよ。
其(その)ときは軍形(ぐんぎやう)兵勢(へいせい)の
事(こと)も自(おのづ)と明(あき)らかなるべし。
と仰(おほせ)られしとなり。

て。兵勢(へいせい)を合戦(かつせん)の法(ほう)なり。軍形(ぐんぎやう)と
百(もゝ)まで人数(にんず)をも動(うごか)さゞるやうにて
やうなれども。後(のち)に三軍(さんぐん)を指揮(さしづ)する
をもつて。こゝに用(もち)ゆるなり。
よく割(わり)て軍伍(ぐんご)をきめ。物事(ものごと)を定(さだ)め。兵(へい)
のまゝと分(わか)ちよく人数(にんず)を一(いつ)ぱいの形(かたち)
三軍(さんぐん)ともに。弱(よわ)きところなきやうにおのおの造作(ぞうさ)
常(つね)の指揮(さしづ)をもよく考(かんがへ)給(たま)へ。急(きう)度(ど)
き給(たま)へ。ほのぐ合戦(かつせん)の物事(ものごと)を呼吸(こきう)のごと

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

おそるべき強生の勇士率の勇性和らぐ
猶豫しやすらふ間あるゆゑ
おもふことくにいたりがたし
敗すれば勇利を失ひ兵勇性
主従強弱の勇性を惣也強弱形
山よりおそろしき百獣震恐ここに臨
して命を求るごとし猛虎よりも強又
つきあたるべからざる先世よりの勇
も闇うをさくおそれ拒ぐ嫉怒の
おそるべきなり其女よそこ

敵軍敗北の勢よりおそるべき
なかの事兵勢と軍形のごとくして
主なき兵士卒勇なきとくもし敗軍
兵も猶而後来我敗兵先我而後来勝
軍敗よりおそるべきなり其故如
先鋒そこなふ必猛く義くして兵鈍ら兵義
敗るる破軍のおそるべきよりも
水於千仞之谿者形也
去勢よりて強くして義くへからざるもの
今義の境よりおそるべきなり其故如

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

いとたやすき戦場にて、それをつとめんもしゆるやかにすべし。
もとより士卒のいさみすゝみて、其勢をさかんならしむるにあり。然れば
其人数をもちて法をなすなり。されば孫子に兵勢を論じて、激水之疾至於漂石者勢也。鷙鳥
之疾至於毀折者節也。故善戦者其勢険其節短。勢如彍
弩節如発機といへるも、弓をひきしぼりて、鼓の拍子をもつて
其合図をまつほどの勢ひにて、その勢をひらきおくべきたゞ
一かたまりにかためて、石のおもきをも漂はすほどの勢
ひを以て、其まゝに放つときは、谷の流れのごとく、とゞまる所なく
敵の弱きを見て、そのまゝに撃ち、鷹鷙鳥の鳥をうつごとし。

引しぼりて放ちたる矢のいきほひのごとし。鷙鳥とは鷹などのたぐひにて、すべて
鳥をとる羽にて、ひきおこりて毀折することをいふ。これ節にて、善戦
者は其勢必険しく、其節必短し。一足も所向にむかひて其勢
ひきしまり、一毫も軍法を敗らずして、かく険しくして、其節
勢をはなつは、その日を刻して急にすることなく、時をはかりてなり。
戦場にて、長くして、遅速をはからず、いたづらに日をおくれば、其勢
ゆるみてその士卒の勢怠り、其勢ぬけて士卒倦怠し、必しも勝利を
失ふべし。されば勢如彍弩とて、必しも決してたゆむべからず
まゆみを引きて、節如発機にて、忽ちにはなちて、其はしるもまた
速かなるべし。故に良将の下に怯卒なし。勇将の下に強兵

なし。孫子のごとく論じて善我者求之於勢不責於人。故能擇人而任勢。任勢者其用人也如轉木石。木石之性。安則靜。危則動。方則止。圓則行。故善戦人之勢。如轉圓石於千仞之山者勢也。孫武の論。一字一句も兵共當たわるべきなし。孫武も雄才なり。孫臏韓信も兵法芸書わすれ。孫武の兵法芸書わすれて敵を料り勝ちを制するときは。孫武の論ずるごとく異ならず。圓圓の如く変化せり。事。史記孫子の伝を読んで多く。圓圓の如く強楚を破り。郢に入。呉威を振ひ。

宋の孫武が謀をもって世に伝われども。孫武の事実たしかならず。孫武。孫臏。兵法をもって世に伝われども。孫臏韓信の如くならず。芸亦天下に著わる。孫武孫臏ともに孫氏なり。孫臏。孫武の兵法を伝えて。旅門の威をふるひ。時魏をして齊の與國趙を圍ましめ。威を将田忌をして孫臏をさして副として趙を救しむ。孫臏八。甚だ魏将龐消とともに兵法を学びし。龐消その能を嫉み。陰に臏をまねきて共に兵法を談じ。行ふ所を問ひ。多く車中にまねく。軍の指圖をもとめ。田忌すでに趙へゆくと。ひそかに孫臏をめして。魏趙ふたつながら相攻むるとき。魏

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

の將兵鋭卒必ず竭(つく)し。老弱運漕(うんさう)して内(うち)を罷(つか)るゝに至らん。趙よりんとするを待(まち)て。我(わが)國(くに)を衝(つ)かんことを恐(おそ)る。其(その)事(こと)魏(ぎ)の大梁(たいりやう)を去(さ)ること甚(はなはだ)遠(とほ)く。自救(じきう)の危(あやう)きに至(いた)らんこと。必(かならず)趙(てう)を一挙(いつきよ)にして。趙の圍(かこみ)を解(とく)のみならず。其(その)弊(つかれ)を魏に收(をさ)めんこと。一挙(いつきよ)両得(りやうとく)の策(さく)なり。魏(ぎ)果(はたし)て趙を救(すく)ひ。趙を攻(せめ)ること急(きう)なり。虚(きよ)を撃(うつ)ときは。必(かならず)趙を救ふに至(いた)らん。是(これ)我(わが)勝利(しやうり)を待(まつ)ものなり。趙(てう)乃(すなはち)亡(ほろ)びて。魏を攻る形(かたち)をもて。魏の勢(いきほひ)を迫(せま)るべし。魏(ぎ)疲(つかれ)て趙の圍(かこみ)を解(とく)に及(およん)で。又(また)兵(へい)を出(いだ)して。我(わが)後(うしろ)を撃(うつ)ときは。魏(ぎ)必(かならず)亡(ほろ)びん。是(これ)一挙(いつきよ)にして趙を救(すく)ひ。魏を亡(ほろぼ)すの策(さく)なり。孫臏(そんひん)之(これ)を聞(きゝ)て。大(おほい)に其(その)策(さく)を賞(しやう)し。即(すなはち)其(その)言(いふ)に従(したが)ひ。兵(へい)を出(いだ)して。魏の大梁(たいりやう)を衝(つ)く。魏(ぎ)大(おほい)に驚(おどろ)き。趙(てう)の圍(かこみ)を解(とき)て。自救(じきう)せんことを恐(おそ)る。龐涓(ほうけん)果(はたし)て趙を捨(すて)て。還(かへ)り撃(うつ)に。魏師(ぎし)疲(つかれ)たり。迎(むかへ)撃(うつ)て大(おほい)に破(やぶ)る。是(これ)一挙(いつきよ)にして趙の圍(かこみ)を解(とき)。魏(ぎ)を破(やぶ)るの策(さく)なり。孫臏(そんひん)の策(さく)。此(かく)の如(ごと)く。趙(てう)を救(すく)ひ。魏を破(やぶ)ること。其(その)策(さく)二(ふた)つながら全(まつた)し。是(これ)孫臏(そんひん)の智(ち)。龐涓(ほうけん)に勝(まさ)ること。遠(とほ)しといふべし。

形(かた)ちあきらかなるの士卒(しそつ)を尽(つく)し。敵(てき)を制(せい)すること。孫臏(そんひん)の魏(ぎ)を伐(うつ)て趙の圍(かこみ)を解(とく)に及(およん)で。又(また)兵(へい)を出(いだ)して。魏を撃(うつ)ときは。敵(てき)必(かならず)疲(つかれ)たり。是(これ)一挙(いつきよ)にして趙を救(すく)ひ。魏を破(やぶ)るの策(さく)なり。孫臏(そんひん)の策(さく)。此(かく)の如(ごと)く。趙(てう)を救(すく)ひ。魏を破(やぶ)ること。其(その)策(さく)二(ふた)つながら全(まつた)し。是(これ)孫臏(そんひん)の智(ち)。龐涓(ほうけん)に勝(まさ)ること。遠(とほ)しといふべし。

形(かた)ちあきらかなるの士卒(しそつ)を尽(つく)し。敵(てき)を制(せい)すること。孫臏(そんひん)の魏(ぎ)を伐(うつ)て趙の圍(かこみ)を解(とく)に及(およん)で。又(また)兵(へい)を出(いだ)して。魏を撃(うつ)ときは。敵(てき)必(かならず)疲(つかれ)たり。是(これ)一挙(いつきよ)にして趙を救(すく)ひ。魏を破(やぶ)るの策(さく)なり。孫臏(そんひん)の策(さく)。此(かく)の如(ごと)く。趙(てう)を救(すく)ひ。魏を破(やぶ)ること。其(その)策(さく)二(ふた)つながら全(まつた)し。是(これ)孫臏(そんひん)の智(ち)。龐涓(ほうけん)に勝(まさ)ること。遠(とほ)しといふべし。

形(かた)ちあきらかなるの士卒(しそつ)を尽(つく)し。敵(てき)を制(せい)すること。孫臏(そんひん)の魏(ぎ)を伐(うつ)て趙の圍(かこみ)を解(とく)に及(およん)で。又(また)兵(へい)を出(いだ)して。魏を撃(うつ)ときは。敵(てき)必(かならず)疲(つかれ)たり。是(これ)一挙(いつきよ)にして趙を救(すく)ひ。魏を破(やぶ)るの策(さく)なり。孫臏(そんひん)の策(さく)。此(かく)の如(ごと)く。趙(てう)を救(すく)ひ。魏を破(やぶ)ること。其(その)策(さく)二(ふた)つながら全(まつた)し。是(これ)孫臏(そんひん)の智(ち)。龐涓(ほうけん)に勝(まさ)ること。遠(とほ)しといふべし。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

兵事ありて悍勇を撰て齊を伐とて
よのつねならぬその勢ひよく統と利導して已に国境
に入ける時に兵氏は百里而趨利者蹶上将と云ことばさら
いふも魏と聞ては一舎して利を趨ことわすれて
齊は魏の境よ入ること一舎すれば十万竈をなすその
明日は五万竈又明日は三万竈やうに日々減じて軍功の強を遁ることわさ
後を追ことせめ、そもそもたゝかひ我勇をよく齊は怯きまを高ひ
今年こゝにおゐて士卒ともに

さきを追ほりんやうく、吾小歩軍をすゝめ
ゆく。二日の道を一日よりうちよ。孫臏吾小歩軍をすゝめ
よ馬陵よもりくし。る陵々幸よ阻狭
ろく廐竈を付ゐて一日に四五竈
龐涓此樹の下よ死なんと大書して
すゝめ方弩をそなへ夜を俟て
ろく。暮よ大木のそを見て
其処を伐ゆれば。龐涓果して書の
のよもりて。火書を又ゝく不書よ
く。発ろく頃まれよ其書をよろ

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

得しにおよびて。これハ魏師大に敗れて。龐涓自刎て死す
豎子が名をなさしむといひて死けり。龐涓ハ前に孫臏
をあしきりし時。人の足をきりて今かく首をきらるゝいかゞしき哉
されバ曾子の戒之戒之出乎爾者反乎爾者也との給ひし
ことばとひはりあるべし。聖賢のいふハ、げにも身をかへりみるべき事。
是も小人の戒とすべし。
なべて世よりそしりを受るハ。わしきらめく者を争ふ事。
前もあらはれしからず。龐涓ハ事はしかなりし。足くのかいかさるに
前を恐れて、孫臏ハ己れを去てかくれしが、其の後に
竈を減して、その樹を去らせて見せければ、おもふさまそ

敵を形にあらはさするやうにして、彼が竈を減じて見すれバ
敵必進を信じて。あやしき樹をきりて白く見すれバ、敵必火を発す。
見るや火を発して万弩俱に発す。万弩俱に発すれバ、敵自刎
して死す。一かうして敵を勢よのせさるなり。よく敵を料
りて兵の形勢に熟せずんバ、かくハいかでかなはん。孫武後
一人なりといへり。楚漢の時にいたりて、前後の儒者の中に。韓信、
をさして兵術に精きて。合戦のことをよくはかりし。其趙王歇を
攻し時。背水の陣をしきて勝し。其今におよびて世に称すなり。
また、兵法に右倍山陵、前左水沢といふことを軍敗の者
なりとす。然れども兵に常勢なし。敵に因りて変化すれバ軍に

も常敗すべき道也此時趙兵二十万と號す漢兵數万にあまらず
况其上皆新に募りし兵なりしに决戦の人なれば韓信あまさに
アらくれぬまちしとさらに陣せしめ今度は水を背にして陣せしむ
ハ死地なり一旦絶ぬればハれまぬがるべき道なくして死すべき也
おのづから心をあはせさらに死をまぬがれて戦ハざる事を得ず
趙軍漢の軍此死地に陥るを見てあざけり以の外に軍をゆるくす
将く兵くすゝみ多くかゝりしに我死戦の気をもて将兵
兵を撃すれば必一戦に勝利を得べしとてかゝりしかば
去くその漢兵を伏せ置きたりければ彼らを背にて陣せしめ
をはば当時諸将もいかにやと信じ伏せしめし上にてかく敵も

あまを見て大に笑ひ捨つらばまさに敵もとより敗るに
きはまりし勢にのりてまつくぞうちかゝりければ戦勝くも其勝
けれ亦を去りさらにくれしぞの外偽りて旗数を捨てくも
く敵として空壁逐利しめ趙旗を拔て漢の赤幟を
立てさ趙軍此氣を奪ひしかばいかにもまた敵を敗れたと
して自然の勢をなく驅しつけさせていまく雪戦し
敵ときけりしら死を恐すまりといへどもあわてしさまで行わ孫臏は
坂兵の敗勢に遭し合戦によりて多くあるを韓信たのみしも
自ら将兵の心を得しして多く是け多くして並ぞ
ハつゞく思はさまも思くし然るに孫臏韓信の兵法

をとゝ孫氏の書よく考るに攻守共に各其勢ありて攻勢よりは守勢よろしからず。其為不可勝以待敵之可勝とて。百全不敗の形也。敵之可勝とは敵の勢よく我を攻るの形也。其機を我よく知て我を攻る勢よく決するを待て。我よく守て敵の攻ざる所を攻るの謂也。故に善く守る者は九地之下に匿れ。善く攻る者は九天之上に動く。故に能自保而全勝也。此守勢攻勢の心相生ず。虚実相形の妙。孫呉の兵術の粋。孫氏の一書に尽たりと云べし。

然ども孫氏の書は其旨深遠にして。其術を得ること容易からず。故に其後武経七書を撰ぶ者。孫呉の書を本として。其説を敷衍せり。其中に李衛公問対は。唐の太宗と李衛公と問答の語を記せり。其説簡にして要。其術精にして妙。其理明にして其法備れり。故に武経の内にては。此書を第一とす。

其後宋の神宗の時に。武学を興し。武挙を設けらるゝに及て。武経七書を以て。武挙の試業とせらる。其時に当て。李衛公問対を。武挙の試業に用ひざるは。其書の深遠にして。其術の精妙なるを。学ぶ者容易に其蘊奥を窺ひ難きを以てなるべし。

然ども其書の深遠にして。其術の精妙なるを。学ぶ者容易に其蘊奥を窺ひ難きを以て。其書を用ひざるは。武挙の試業の法。其意を得ざるの甚しきものなり。

ゆゑに其書を用ひざるべからず。但其書深遠にして。其術精妙なるを以て。其書を学ぶ者。容易に其蘊奥を窺ひ難きは。其書の罪にあらず。其解釈の罪なり。其解釈の罪なるを以て。其書を用ひざるは。其法の罪にあらず。其人の罪なり。

其書を学ぶ者。容易に其蘊奥を窺ひ難きは。其書の罪にあらず。其解釈の罪なり。其解釈の罪なるを以て。其書を用ひざるは。其法の罪にあらず。其人の罪なり。

其書を学ぶ者。容易に其蘊奥を窺ひ難きは。其書の罪にあらず。其解釈の罪なり。其解釈の罪なるを以て。其書を用ひざるは。其法の罪にあらず。其人の罪なり。

其書を学ぶ者。容易に其蘊奥を窺ひ難きは。其書の罪にあらず。其解釈の罪なり。其解釈の罪なるを以て。其書を用ひざるは。其法の罪にあらず。其人の罪なり。

其書を学ぶ者。容易に其蘊奥を窺ひ難きは。其書の罪にあらず。其解釈の罪なり。其解釈の罪なるを以て。其書を用ひざるは。其法の罪にあらず。其人の罪なり。

其書を学ぶ者。容易に其蘊奥を窺ひ難きは。其書の罪にあらず。其解釈の罪なり。其解釈の罪なるを以て。其書を用ひざるは。其法の罪にあらず。其人の罪なり。

其書を学ぶ者。容易に其蘊奥を窺ひ難きは。其書の罪にあらず。其解釈の罪なり。其解釈の罪なるを以て。其書を用ひざるは。其法の罪にあらず。其人の罪なり。

其書を学ぶ者。容易に其蘊奥を窺ひ難きは。其書の罪にあらず。其解釈の罪なり。其解釈の罪なるを以て。其書を用ひざるは。其法の罪にあらず。其人の罪なり。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s　　ガラス使用

抑つら〳〵そもそも巧而令色鮮矣仁
やうの事は昔も今も人と殺し合ふ事を禁じ
歌ふところのこと〳〵くなり。むかし
攻るは士五百を連ね三十七を
よる巧而令色といふも此ある
ねどもまさしく我朝にも其上故此の虎ノ尹雄〳〵
ばかりの事にて軍令行〳〵ざるよう
此ある事を以て敵の可掠を知ずまた
敵の乏きに掠んとせず。高氏
ずや況又巧而令色といふも此ある
やうの事は昔も今も人と殺し合ふ事を禁じ
歌ふところのこと〳〵くなり。むかし
攻るは士五百を連ね三十七を
よる巧而令色といふも此ある
ねどもまさしく我朝にも其上故此の虎ノ尹雄〳〵
ばかりの事にて軍令行〳〵ざるよう
此ある事を以て敵の可掠を知ずまた
敵の乏きに掠んとせず。高氏

巧而令色鮮矣仁
やうの事は昔も今も人と殺し合ふ事を禁じ
歌ふところのこと〳〵くなり。むかし
攻るは士五百を連ね三十七を
よる巧而令色といふも此ある
ねどもまさしく我朝にも其上故此の虎ノ尹雄〳〵
ばかりの事にて軍令行〳〵ざるよう
此ある事を以て敵の可掠を知ずまた
敵の乏きに掠んとせず。高氏

芸刃を修〳〵ず偶〳〵偶滅の義多
みて。諸暴止〳〵かの兵を秀吉ハそれ仁
やうの事〳〵うけ。豈ハ此の如き必功を一発
すること能ず。義とかの如き必功を一発
恐らくは能ず。いかゞ此の如き必功
みて。礼楽意ゆ八百年を伝代し。
師を起〳〵て。加辞を伝代し。
く人民を奚肉せ〳〵ふ。天下の人心離散
て收ざるの禍なり。孫武の一言。兵の要旨を

ゝゝ。

兵を詭道

池田筑後守輝政の事会せしゝ人も一なり。感服し給ふ。世に兵法を知る大将と称せらるゝ。一枚挙ありしが法令厳粛にして敵を制せらるゝ。かゝる人こそ兵の権を握り給ふべきやうにおもはるゝ。仁義の兵は堂々として異端なし。兵とするに足らず。智謀をもちゐるは仁義の兵にあらず。

道中をすゝめ給ひしとぞ。これ兵を詭道とするの意なり。

てそなはらざる時は、敵人の為に破られ、行道もいつもゝ分けざる義を制する権謀なり。別段のまゝにて、ひさる道中をする時は、今兵乃至四五万を率ひて、古今兵法の書を読破し、戦闘攻撃の術を兵と申すべし。

古今の兵を論じて、孫呉・張良・韓信・荀況・鋭士・魏の武卒・斉の技撃そのほか、皆仁義・権文・詐謀・秦の如き、仁義を以て本とせざる兵法を用ひし力を以てなり。

兵卒の將に赴く事、子弟の父兄を衛り、手臂の頭目を
捍ぐがごとし。是を仁義の兵といふ。桓文の兵は信義をもて
す。律令は立てられざれども、三軍畏威して、一人も其義を踰ゆる
ことなし。是を節制の兵といふ。嬴秦の兵は然らず、賞罰を
嚴にし、首級をとるを功とし、兵に節制あることなし。されば
死を以て士卒を淬勵して勇敢を僞らしむ。故に敵に赴く
義死する事をしらず。其強きこと魏齊の兵に比する
に甚優れり。魏の兵は勇力の卒を募り、齊の兵は技
撃の材を選び、一朝にまはれて敵と鬭しむ。其兵た
ゞ利を要して、おのづから死敵の志なし。是によりていふ。

秦の鋭士にもまさりて、更に優劣あるまじといふ。一切に武力
をもとゝし、取勝の一事をのみ先として、兵法に言
制の兵にも及ぶべからず。仁義の兵といふも、僅に兵法
形勢、智謀をするぬ事なれば、是を捨てゝ、敵を料り
勝ことを制しがたきをいへるにて、仁義の兵に後世の兵法ごとく
詐僞を尚び、反間を用ふるのたぐひ巧なる事をいはず
まじく也。或は敵に對し、虚を衝き實を避く、或は敵の
鋭氣を挫き、或は敵の惰氣をうち、或はふせぎをもつて、或は
險阻に據り、狹きにこもりて敵を制して、敵に制せられざれば、敵の
いさゝか敵に致されざるのみ。雑書には兵法にのせたるは、着道

宋の時、岳飛が戦ふにおゐて、一将おそれて敵に圍まれしに。炎天の事なりしに、敵きびしくせめて戦をいどみしかども、深く壘を閉て兵を出さず、一人は冑をぬぎて座中にまたたく。せまりしが、時を移して冑をもぬがず、其人堪がたくなりし。かゝりければ、敵もさすがに困すんと量りて、急にきびしく出でたり。敵つひに破れて敗軍しけるとなん。試すも其の兵を論ずるやうに、いひ出して、兵をかてあるべき事なりし。諸葛亮の兵を見ても、中々兵を待ちされば孔子も三軍を行ふ際、事に臨で懼れ、好謀而成者なりとせられし。呉國の事ハ、学も覚えて始めし、並家武家

の世になりしよりは、天下攻伐をはなはだしくして、戦争やむことなくなりにし。建武の中興の後、武家となりて、法度くはしからず、まで、日本合戦の事は、ことごとく法度もたゞ闘の間合の卒をわけて、衆の多寡をもつて兵の強弱を争ひ、又は其の勢策をもつて、両軍よく勢をつくして相撲角力の場のごとく、一時に勝負を決するなりし。或は勝時もありて、或は負る時もありて、勝も負も一旦の事なり。なかなか士卒を多くころしての上ねらひなし。兵法の論すくなく、それ齊の技撃、魏の武卒、秦の鋭士、利氏の季世に至りて、英雄蠭起し、四方に割據して、兵を磨き士を選び、日に術を精備して、東

ひとこと兵兵雲紛よりて百戦
ともいうべきまで中々我国と格
ゆるう脈もろう津をとくすま
つこと、なき、如何の兵をよく
すくめる。強きまで南代兵を老
兵法を作るのとくやく兵法の
を制するの謀よおとつまをも
くらき人を。兵の擯して国を
弥をというある。先年人のいひし
ふと兵者詭道也とあるを兵を

兵を詭道なりとハよもむくうたがひ
きにも兵を詭道というを嘆く。兵をよく
時うてて、たるも道なりとハ
の二字と後刻同一なるも。字義よ
ようく常格をもくくる道を詭道と
孫子も能而示之不能用而示之不用やいふ
すくすまで乃至用而示之不用而示之近
すべき。のまくに兵をまもるべきなり
いもすべき旅行の道でもいふ
世に詭遇して獲禽のごとくやそ

わざに見えつけ程に手足の働きにありて兵を詭道なりといふもと
ハ孫子しいひし詭道なるゆゑハ王道にあらざる者なりと説て、いにしへ国
家を治るの本とすべき。況や後代の兵家に相伝ふるハ皆兵
の末事なるをや。或ハ将を誅し、或ハ宋儒に比べ、又ハ古戦
此類を会後するなどして、孫子の書を見るに人を欺く者也。た
ましいふべし。わざくも文字について解く故に詭道二字の義
まさに過ぎざれバとく孫子の解もさとを得べきやさらに
すこし其説を尋ぬに多くは臆見に出て相遠ざかる事也。
無知無能はすみやかにいふべし
不忘向君

後数月ありて諸侯来会せしに、兼日兵の指述をきくといふ
事を取りかくの事。自分のみ若く見ゆるに無事に限れる太平の
ハ何事も不調法にして生ずることよくいふ。様子をおもふに思案
るゆく仕方此ときふしきをあつらへたるハ多くして文に拘り実
を失ひ故にやくとする事ハ機会にをくれゆく後悔する事も
ありけれバ心にかけてうしなき害なくしてといふハ翁きこえて、さ
やくしてもいへ。但其生ずるに本源あり。この常に心がけ
もに気ふるゝところ本源を思ひしめるにより気ふるゝまゝれ
ハ事物に奪はれぬ程にあそびつゝ落ちくづれゆく様やうなる
あやふく思ひ、さればすこしやうなる様やうなるより事生ずるを

思ひ給ふなりしが、速かなるにしもあらで、儀にすゝみやうにすまふ人へは
せきて気さへいらち給ひて、事に当りて狼狽(らうばい)して、気もおく
れぬるなりき。却ていと悪しき害をも招き給ひし。先代法儀の家
にある宿老の我を見るにつけ、無義の世を訴へしか、其
侍らんゆゑにや、気に障るにまかせて後悔の場に臨みて、其道
ある事他人の及ぶべき事にもあらぬ、雑兵ながら、仮にも仕立て、其子
孫越後の堀の家に仕へし者あり。しばらく後にて越後なる
の家老に堀監物といふ名ある者あり。監物二代なり、二代監物は慶長十五年貫丹後に五百石
争論して、最上に論じて一家の監物也、父監物直政が二男
なりしが、監物とて越後なる侍屋の邸(てい)に居て、自害なりしか
なるを浪人(たく)出でけるに、越後なるに逃(くらゐ)ある君ありしが、かくとき

居て色よき事を語りしに、越後にも抜(ぬき)ん出せし事に、監物はる
かに見下し給ひて一座に向ひて、彼君をさへ傲(たか)しげなりしかた
ちに語りしたる士なれば、常に無下に申しける。後日に右の士をも監
物に近づく其日の事をいひ出て、自慢といひて無道なる事と
いひ、我等も今ぞ見しかとそれ迄にいひしをば聞かせる
の跡には彼を出仕させるに、いつぞや御迄一座に参りければ、頗る色
ふ実なる事にて我もなし、といひしかや、名とく我も忠集
にまかせしを、まさしく事ども、其事につけて、ともかくの兵勝
ありしの事なり。後にも此兵略なき故に其集を出でしとき
聞くやして我を無念に此後も名を残したる殿のは後を嗣ぎてあるる

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』　請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

おくの公侯に仕へ、今ここに人をへ
まねくやうに仕へやうもなし。扨
よ儒者に仕へやうもなし。神仏に仕
へやうもなし。其外の諸芸に仕へ
やうもなし。よつて其身の活業
のまゝに居ることなり。
も。余ここにおゐて生涯
志を絶つ。こゝろざしとやの
ごとくすゝむ。聖賢
則法論郷党篇を讀よ。君在ときは如在
也。事其祖よ威儀中適之類と
いふごとく。又張子況於
與ふ不忘の君に威儀中適
よふよりの説と
ありの
きくて横渠の依緊要なる
終生の用とするなといふ。
君よ庶幾。君よ侍生する時は
臨物ごとよく横渠無くの
おくれなの生や。其ごとのはう
やいなや。

大敵をよなし

翁いひけるは、近き事なれど、今の學者聖賢の書を讀ても、
其文の義理の穿鑿をのみして、是非をいひ、僉議(せむぎ)又は
文章詩作などに耽りて、身に行ふ事はなし。然るに武士たる人は、學問は
さもなくして、只志のたしかなるより、
志ありて一己(こ)の身を修むる事は、覺悟を決して、直(たゞち)に行ひ、
しかも端的(たんてき)に其族(ぞく)を見せしめ候。學術なくとも、是は理に當
理にかなへる事もあるべく候。其始めは末々まで聖賢の教に
もかなひ、指南に從ふにまかせ候や。大方の生物
なく、思ひ知りて、世に行ふにまかせ候
近く寛永の比、永井信濃守尚政(なをまさ)は

執權(しつけん)昇進して寵任(てうにん)せられし比ほひ、其比井伊掃部頭直孝(なほたか)は
一代の元老(げんらう)なれば、おもんじ給ひて、或時謙遜(けんそん)して、我等弱年
の身なれど、特恩(とくおん)を蒙(かうむ)りて、重職(ちようしよく)を汚し
格を守るべき事なれど、老功の仁なれば、是は我等
心得になるべき義をも仰せ聞けよかしと申されしかば、
直孝、掃部頭是を感じて、氣色(きしよく)するにもあらず、暫くありて、是は
此中も一つ存じよりたる事候へど、左様もなりがたく、大
切なる事なれば、申さずして過ぎ候ひきと云。
彼是にて、其日は歸りしが、其後又禮服(れいふく)を
着し、彼宅へ往きて、掃部頭出でて對面の後、世語り

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s
ガラス使用

池田大敵やくいまゝでやくくらそくあるもの
やくれば一言やくいそ必ず亡ぶまでもなきもの
う国の義士即位のてくやがて天下をやくくらく
ゆくゝ烟とし万世よ伝ふべき道あるもの
ちて天下をはゝさく甚言丹書よおやとまた
齊戒一統やくわてこの度義士旅片戒端晃して東両
して立給ふも甚以て天下と面々て丹書のごとくよ
さのおくく敬勝急者吉急勝敬者滅義勝欲者従欲
勝義者凶今池田大敵の強鄙諺やのまでも丹書よ戒よ叩
急やおゆくよ君よ法之ゝまを勉るよ池田のあしきこゝ雖も

去ともあるまゝやくもつゝむ大の実よもつ
雨よ雨すしておくよんとそもゝ人なし
てる共をまゝ猶豫を招くそもゝれ臍を噬をおよきそに
掃部頭を老よ池田を林して男よをつけねんのしとゝ
実よ仕まの急要なあよおの旅を大切のまゝ
やくて伝源るも伝てまゝなのよ接ぬ職あるよ水
ゝくゝうくあるべき甚ゝおくらさ海よいまゝ甚ゝ前
と宅め甚人よ盛服させくおくく他の接せらまゝ心ゝの
ちて天下の丹書を表ゝよ投考一冊をあゝ。かくあるゝのハ
甚まゝ将くそのゝと将くまハ甚伝源ゝら

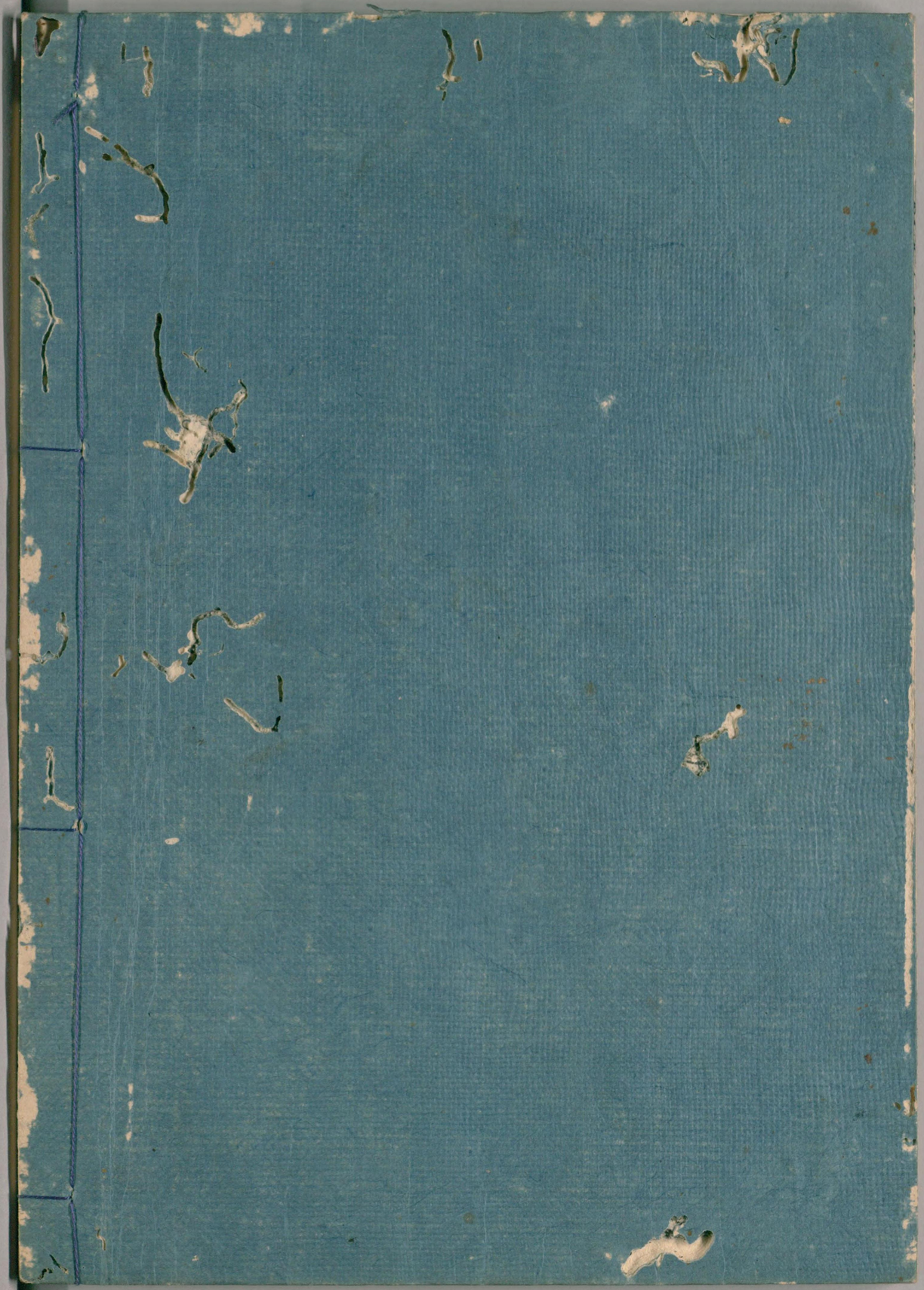
祖法甚人の善よく祭りて。亦深意遠到を見る。掃除
其の初のまゝにはあらざるも。きよくとゝのひ。
よく守るに我をわすれ。法令の事となりて
よなるべく。百年も。世よ乱るゝのくわ
るゝときの兵ぎ。なくなるべし
然宗徳沢仁厚なるゆゑ。天下を治めて。仁政に減よ虐殺せず。歴
代殺戮の風変じて。寛永の
際のごとく。左廷の法令運よ真
にして。其沢外よ隆治なるべし。今其へんと少よ

いたる。篤實簡重寛厚の長者也。其政を謀るあを虚文
を捨く。事実をこゝろ人を択ひ材能を退き。実りとす
む。世者巧を尚の風のまゝを八。其おきよ似てまこと。
凡百の有司いたりて廉恥なき。奔競なる陋の風。各ち勇
奔職して。時勢よ随ひて。戦射となく。庶政わろゝ百事煩
く。庶政わろゝ百事煩ものゝ。ゆへ。
まこと。凡倫時一流の士。こゝろ。其いくとき
なるべきよわろし。然るよ篤実の士を。淳厚ありて見よくの
とし。材智の士を。敏捷みゝてまよさ人
材をとりよ。ゆへよ。材智の士を。使ひをすて。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s　ガラス使用

し。さしもあるまじく職と矣し。志ばなく功を効をるつ行よ
般業共功おうとゐんゆまとも。まおまよ会被うちおくし事実
常よ原も下情考よ塞ゐ妙ま八政敷民癒しそよや
起るそし。そしてよのよて。いかよ。兵よ限られ治世共政も拙
生をようやくして巧生をねさとせ民。むく諸葛孝
候の蜀よけるよ。おおへ相そして内外の任をそう。高世の
材をそくく角うる更そして。ほと他
め。僚佐の誅を求さ。角うるむ拙の地よ處をとくのて
始うよ共魏をしの。毎我必勝しこの八司馬懿畏さ事虎
のとし。共差別をねする志能七舎よ志穫ん服し
よやくう八至穫ん服し

て天威とれ。神速ある事想ひ八足ん。芸度出師表
よいつらけや劉繇王朗各據州郡論安言計動ら聖人群
疑滿腹衆寡敵胸今歳不戦明年不征使孫策坐大
遂并江東こも巧ま共害を論するあ今共云
候の度量規模とよくよ孫我ら及
ようくし。孫我の拙速巧久共治。最軍両共亀鑑うて。我
候そうもこうまあるさそうを志ろし。孫我も亦くん禁う
事那。



国立国会図書館　　タイトル『駿台雑話 : 5巻』 請求記号 121.43-M985s

ガラス使用